

氏名	那須里絵
氏名	NASU, Rie
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第227号
学位授与年月日	2021年5月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Therapeutic Change of Ways of Feeling Loneliness in Group Therapy with Adolescent Girls 思春期女子のグループセラピーにおける孤独感体験の治療的变化
論文審査委員	主査 上級准教授 西村馨 副査 教授 森島泰則 副査 上級准教授 直井望

---

## 論文内容の要旨

本研究は、対人希求を持ちながら仲間関係を得ることが難しく、学校や生活の場で孤立していた思春期女子がグループセラピーの場で示した治療的变化について詳述したものである。

思春期の子どもにとって、仲間関係の形成と深化は発達課題であり、成長体験をもたらすものであると指摘されていた。が同時に、仲間関係を適切に構築できないために学校で孤立し、不登校などの問題へと発展することも少なくない。この問題への対処として、学校教育相談、スクールカウンセリング、心理臨床現場において、仲間関係の形成を通じた適応への指導が重要視されてきたものの、いまだその手法が十分認識され、浸透しているとは言い難く、その実践手法と効果の普及が望まれる。本研究は、そのような問題を踏まえ、グループセラピーの手法によって仲間関係の発展を促すモデルを描き、少数ではあるが、実践例を通して孤独感の変化とその過程を検討することを試みた。

研究1は思春期のグループセラピーの方法論についての文献を概観し、現代日本における思春期に対するグループセラピー適用の具体的手法を検討した。Grunebaum & Solomon (1980, 1982) の仲間関係発達促進モデルに基づき、仲間関係発達を促進する上でのパラメーター(枠組み、活動、グループ発達段階、セラピストの基本的技法)を整

理し、グループセラピーのデザインを試みた。メンバー選定の基準、関係性を促進するために、グループ発達段階を踏まえた活動の導入や、セラピストの基本姿勢を提示した。研究2と研究3は、研究1のデザインを適用して、大学研究機関で実施されたグループセラピーの事例研究を行った。仲間希求を持ちながら、仲間体験を持たず、学校で孤立している中学生女子4名からなるグループで、毎週1回120分実施された。研究2、研究3では、AとBという2名のメンバーに焦点づけ、およそ1年半のグループでのプロセスをそれぞれ詳述し、検討した。

研究2で取り上げたAは、児童虐待によるトラウマを抱え、養護施設で暮らしていた。学校で話しができる友人がいなかった。グループ参加当初、Aはタイミングよく応答できるようになることで友人を作ることを目標としていた。グループでは、創作や調理などの活動には参加していた、発言はほとんどなく、話す時も非常に小さい声であった。他のメンバーはAを気遣いながら、話を深められないでいた。あるセッションでAが欠席した時、Aが時折用いる「施設」や「面会」という言葉について、他のメンバーは関心を持ちながらも、それ以上踏み込めないということが話題になった。その後、Aも自分の生活について説明が難しかったことを語れるようになり、このことがきっかけとなってAは自発的に話せるようになり、徐々に情緒的交流が深まっていった。Aが話しだしにくい背景には、トラウマに起因し、その後修復できないできた「隔絶」(Stolorow, 2007)の感覚があり、他者と同じ世界にいる感覚が持てないできた。グループで、Aと他のメンバーたちがそれぞれ「話がしにくい」と感じた体験は、この「隔絶感」が形態化したものと考えられた。グループがこの壁を解消できたところから、Aと他のメンバーの親密性が高まり、仲間関係発達と心理的成長が見られた。

研究3で取りあげたBは、幼少期からかん黙様症状や書字障害、ASD傾向が見られていた。学校では仲間関係に「挑戦」せず、友達を作る上では趣味であるサブカルチャーの話題が共有できることを重視していた。その背景には、児童期からの長期に亘る仲間関係からの孤立と、孤立について考えることを回避しサブカルチャーに没入した結果、親密性の発達が阻害されるという心理的課題があった。グループ初期は、サブカルチャーについての一方的な会話が特徴的であった。この時期、Bはグループにいることの安心感に基づいて仲間関係に挑戦していると捉え、Bのあり方を許容した。その結果、B及びグループ全体の安心感が発達し、Bはいつしか学校の悩みや不安を話したり、メンバーの悩みに助言したりするようになっていった。そのようなやり取りを通して、当初は孤立感や劣等感として語られていた感覚は、やがて自己の独自性の感覚へと変化し、それを積極的に認められるようになった。こうしたBの心理的成長は仲間関係の発達と相互作用し生じていた。

それらの事例研究を踏まえ、続く総合的検討の章では、AとBそれぞれの孤独感体験を、①インテーク面接、②フィードバック面接、③グループセッション、④セラピストとAの個人面接という4種類の逐語データから再度詳細に分析し、検討した。

孤独感体験の変化については、①仲間関係からの孤立に伴う孤独感の緩和、②親密性に関わる孤独感の緩和、③思春期の発達課題に伴い生じる孤独感の明確化・深化という連続性をもって展開していることが確認された。

さらに、そのような体験的变化は、個人の心理的課題が仲間関係の関係性に反映され、それに対して、セラピストが臨床的介入を行うという循環的關係をなしていると整理された。中でも、グループ全体が安心できる場になること、そこからお互いの体験に関心を向け合うことができるようになるプロセスが重要であると指摘した。そこでは、**chumship**機能として知られる、双方向的な親密性の形成を通して、体験を共有し、愛着に関わるトラウマの体験の克服の可能性があると指摘した。

## 論文審査結果の要旨

那須氏の博士論文最終発表会は、2021年5月26日15時10分から17時00分において、Zoomミーティングで行われた。研究発表が30分間なされ、次いで参加者からの質疑応答が30分間行われ、その後、審査委員との口頭試問が40分間行われた。

審査委員は、提出された博士論文と最終発表、質疑応答と口頭試問の成果を踏まえ、那須氏を合格とすることに合意した。

思春期の子どもの、仲間関係形成を通じた心理的成長の支援、とりわけトラウマ体験や発達障害に関わる心理的課題を抱える子どもたちは、そのような背景ゆえの対人交流の難しさを理解し、それを支援していくための専門的視点が求められる。しかし、その必要性にもかかわらず、手法や効果についての基本的データが不十分である。那須氏による本研究は、そのような問題意識に応えるものである。

本研究では、グループセラピー場面だけでなく、個人面接や親子での面接場面も合わせた子どもの生の声と直接的関わりの中で「孤独感体験」が治療的経験を通してどのように変化していくのかが詳細に検討された。周囲から孤立した孤独感を抱えた子どもが、成長をもたらす可能性を秘めた人間的環境が提供されたときにどのように変化していくのかということについては議論されたものがほぼないと言ってよい。およそ1年半のグループセラピーを中心とした治療的関わりや補助的な面接を通して見出されたことは、思春期においては、表面的に仲良くなることで孤独から解放されるという単純なプロセスではない。むしろ、すれ違いや食い違いの中に「心理的課題」が現れ、それについて注意を向け、話し合いを重ねる中で、お互いの孤独がより理解されるようになり、そのお互いの孤独を理解することで親密性が増すという逆説であった。しかしそこでの孤独は、情緒的つながりの実感を伴った「自分」という感覚であり、自我同一性の確立に向けた動因となるものと考えられる。

この知見は現代においては、とりわけ意義深いと思われる。空気を読み合って、同調し、本音を隠して協調することが仲間関係における適応であると思われがちであるが、そうではなく、むしろ自分の本音を語りあえる空間を作り出すことが発達を促進することが見出されたためである。またそれが、これまで仲間関係を持てなかった子どもであっても可能であるということも重要である。

那須自身、セラピストを担当し、関わりながらデータを収集するというのは、いわゆる参与観察 (participant observation) 手法である。対象2名というサンプリングについては不十分のそしりを免れないであろう。しかし、毎週1回120分のグループセッションを

1年半にわたって行ったほか、事例Aにおいては個人面接も補助的に行っている。さらに、事前面接、チーム途中のフィードバック面接、振り返り面接を行っており、個人やその個人を取り巻く環境を考察する質的データは膨大なものであると言わねばならない。そのような関わりの中で、子どもたちの声を直接聞き、関わり、自らの姿勢を顧みながら、その気づきをグループ運営に反映させ、事例のA、Bともに大変意義深い変化を見せた。この事例記録そのものに資料としての貴重な価値があると言える。

だが、それだけでなく、その事例で得られた知見についての確証を得るために、録画データ、録音データを振り返って詳細な検証をしており、その質的研究としての努力と意義も評価される。

そのような研究の意義を、委員一同高く評価し、今後の発展を期待して、合格とした。

## Summary of Doctoral Dissertation

This study aims to explore therapeutic changes exhibited in group therapy of adolescent girls who had interpersonal aspirations but had difficulties in establishing peer relationships and were isolated in school and their daily life.

It has been pointed out that forming and deepening of peer relationships is a developmental task and provides a growth experience for adolescents. At the same time, however, there are many adolescents who are isolated at school due to the inability to properly build peer relationships, leading to problems such as school refusal. In order to deal with this problem, guidance on adaptation through the formation of peer relationships has been emphasized in school education and school counseling, but the method has not been permeated yet. Based on such problems, this study drew a model that promotes the development of peer relationships by group therapy modality and attempted to examine changes in loneliness and its process through practical examples, although in a small number.

Study 1 reviewed the literature on adolescent group therapy methodologies and examined specific methods for applying group therapy to adolescents in modern Japan. Based on peer theory of group psychotherapy (Grunebaum & Solomon, 1980, 1982), the parameters (framework, therapeutic activities, group developmental stages, therapist's basic skills) for promoting peer relationship development are organized and group therapy design. The criteria for member selection, introduction of activities according to the group development stage and the basic stance of the therapist were presented.

Study 2 and Study 3 applied the design of Study 1 to a case study of group therapy conducted at a university research institution. It was held once a week for 120 minutes in a group of four junior high school girls who wished to have friends but had no experience of friends and were isolated at school. In Study 2 and Study 3, two members, A and B, were focused and the process in the group for about one and a half years was described and examined in detail.

A, who was featured in Study 2, was traumatized by child abuse and lived in a nursing home. She had no friends to talk to at school. When she first joined the group, A aimed to make her friends by being able to respond in a proper manner. In the group, she was involved in activities such as art and craft and cooking, with few remarks and a very quiet voice when speaking. The other members were concerned about A but couldn't talk much. When A was absent in one session, she talked about the words "nursing home" and "meeting with mother" that A occasionally uses, while other members were interested but couldn't go any further. After that, they became able to talk about how

difficult it was for A to explain her life, which led her to speak spontaneously and gradually deepen her emotional interaction. The background that A is difficult to talk about is a sense of "alienation" (Stolorow, 2007) that could not be repaired afterwards due to trauma, and I could not feel that I was in the same world as others. The experience that A and the other members each felt "difficult to talk" in the group was thought to be a formalization of this "sense of alienation." From the point where the group was able to break this barrier, the intimacy between A and the other members increased, and fellowship development and psychological growth were seen.

B, in Study 3, had mutism-like symptoms, dyslexia, and ASD tendency from an early age. At school she avoided from her peers and she loved to talk about subcultures, which is her hobby. Behind this was the psychological problem of long-term isolation from peer relationships from childhood as a result of avoiding thinking about isolation and immersing in subculture. Early in the group, her one-way talk about subculture was outstanding. At this time, therapist found that B was trying to do something new to create friendship based on the sense of security in the group. As a result, B and the group as a whole developed a sense of security, and B began to talk about school worries and anxieties and advise members' worries. Through such exchanges, the sensation that was initially described as a sense of isolation or inferiority complex eventually changed to a sense of self-reliance, which was positively recognized. This psychological growth of B was caused by interacting with the development of peer relationships.

Based on these case studies, in the chapter of comprehensive examination that follows, four types of verbatim data of each of A and B's loneliness experience, (1) intake interviews, (2) feedback interviews, (3) group sessions, and (4) individual interviews with A were analyzed in detail and examined.

Regarding changes in the experience of loneliness, (1) alleviation of loneliness due to isolation from peer relationships, (2) alleviation of loneliness related to intimacy, and (3) clarification and deepening of loneliness caused by developmental tasks, were confirmed.

In addition, such experiential changes were organized as a cyclical relationship in which the individual's psychological challenges were reflected in peer relationships, with therapists performing clinical interventions. Above all, it is important to have a place where the entire group can feel at ease, and from there, the process of being able to focus on each other's experiences started. It was pointed out that sharing experiences of that kind could lead to overcoming attachment trauma through the formation of mutual intimacy recognized as "chumship function."

## Summary of the Dissertation Evaluation

From 15:10 on May 26, 2021, the final presentation of Ms. Nasu's doctoral dissertation was held by the Zoom meeting. The presentation was made for 30 minutes, followed by a question and answer session with the participants for 30 minutes, followed by an oral examination with the committee members for 40 minutes.

The committee agreed to pass Ms. Nasu based on the submitted doctoral dissertation, final presentation, and oral examination results.

A professional perspective is required to understand and support adolescents' psychological growth through peer relationships, especially those with psychological challenges related to traumatic experiences and developmental disabilities. However, despite its need, there is insufficient basic data on methods and effects. This research by Ms. Nasu tries to respond to such problems.

In this study, how the "ways of feeling loneliness " change through therapeutic experience were discussed based on the adolescents' voices, which are included not only in group therapy scenes but also in individual interviews and parent-child interviews. What was discovered through therapeutic involvement for about a year and a half is not a simple process in adolescence that is freed from loneliness by superficially getting along, but rather, "psychological tasks" emerge in discrepancies of communications, and as we pay attention to them and hold discussions, they become more aware of each other's loneliness, and by understanding each other's loneliness, they become intimate. It was such a paradox. However, the loneliness there is a feeling of "self" with a feeling of emotional connection with others and is considered a motive for establishing ego identity.

This finding seems to be particularly significant in modern times because it was found that creating a space where one can talk about one's true feelings promotes development. It is also important that this is possible even for those who have never had a companionship.

Ms. Nasu took a role of therapist of the group and collected data; it was so-called "participant observation" method. Sampling of two subjects might be insufficient. However, in addition to having a 120-minute group session once a week for a year and a half, an individual interview with case A is also conducted as a supplement. In addition, pre-interviews, feedback interviews during terms, and retrospective interviews were conducted. The amount of qualitative data about individuals and their environment is enormous. In such a relationship, while listening directly to the adolescents' voices, the awareness about what is going on the group as well as her own mind was reflected in



the group management. By doing that, both cases A and B showed very significant changes. It can be said that this is valuable as a case record.

Nevertheless, in order to verify the findings in these cases, she looked back on the recorded data and carried out detailed re-examination. The efforts and significance of the qualitative research should be also evaluated.

All the committee members highly evaluated the significance of this research and passed it with expectation of Ms. Nasu's future development.